第22図　SK5（２）

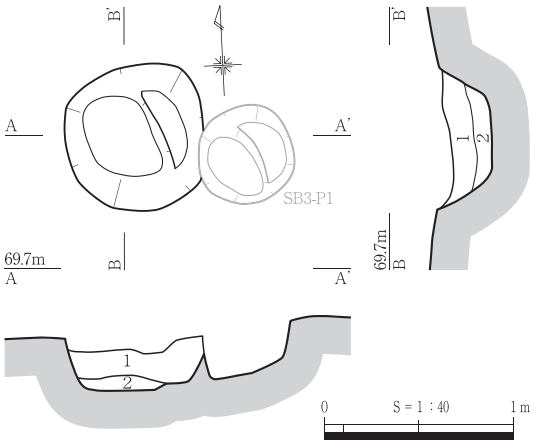
平面は円形で、長径0.77m、短径0.74mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは0.3mを測る。底面も円形で、長径0.5m、短径0.3mを測り、平坦である。

埋土は2層に分かれ、底面から10cmの高さまでの下層（２層）は、遺物包含層と同質の土であり、それを検出面の高さまで被覆する上層（１層）は、土坑が掘り込まれた地山と同質の土である。いずれも固くしまっていたことから、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

上層の埋土中から、伯耆国庁第２段階に比定される赤色顔料塗彩の土師器坏28が破片となって出土した。

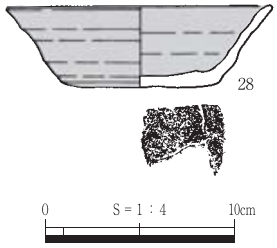
出土した土器から、SK７の時期は９世紀後半ごろと推定されるが、SB３から出土した土器と時期差が認められないため、SB３建設の直前に埋め戻されたものと考えられる。

当遺構とSB３の柱掘方の形状及び規模が似ていることから、SB３の建設に際して、設計変更に伴い埋め戻された柱穴の可能性がある。



1　にぶい黄褐色砂混じりシルト（10YR5/3）径 2cm の礫を 10％含む。固くしまる。地山由来。埋戻し土
2　黒褐色シルト（10YR3/2）径５～ 10mm の礫が５％混じる。固くしまる。

第24図　SK７



第25図　SK７出土遺物

５　自然河川・溝

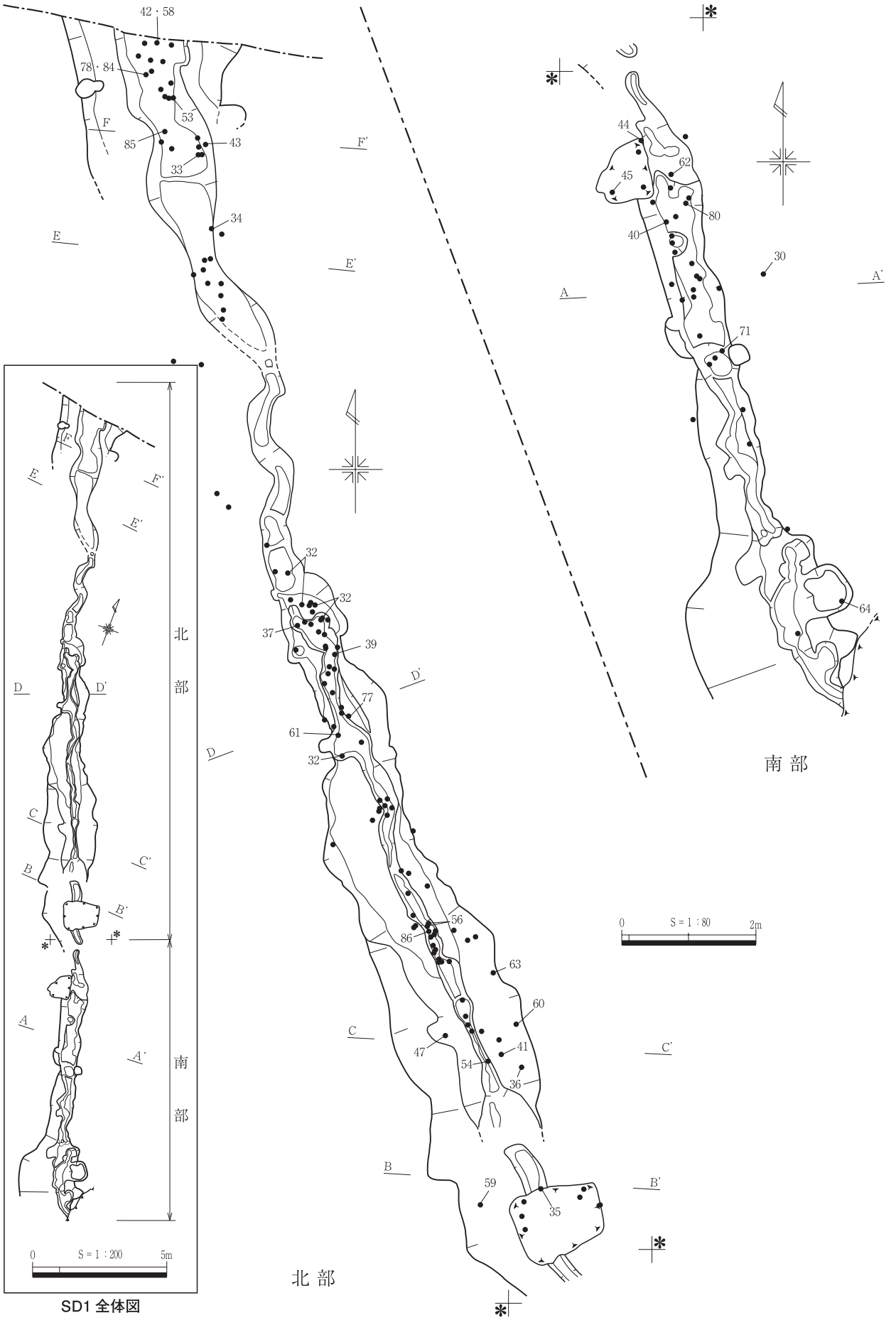
SD１（第26～29図、PL.12・13・20・22）

調査区中央のＢ９、Ｃ８、Ｃ９、Ｄ８、Ｅ８グリッドにあり、調査区中央を横断する自然河川である。圃場整備時の削平によって、形状が大きく損なわれている。E層の上面で検出した。

長さは30m以上、幅は北側の最大で３m、深さ0.5mを測る。流れの向きは南南東から北北西（N－20°－W）で、等高線の向きと一致する。断面は緩い皿状を呈しているが、川床の中央部は一段深く抉れ、澪筋状の溝が形成されている。この溝は幅も深さも一定ではなく、ところどころで蛇行し、窪んでいる。

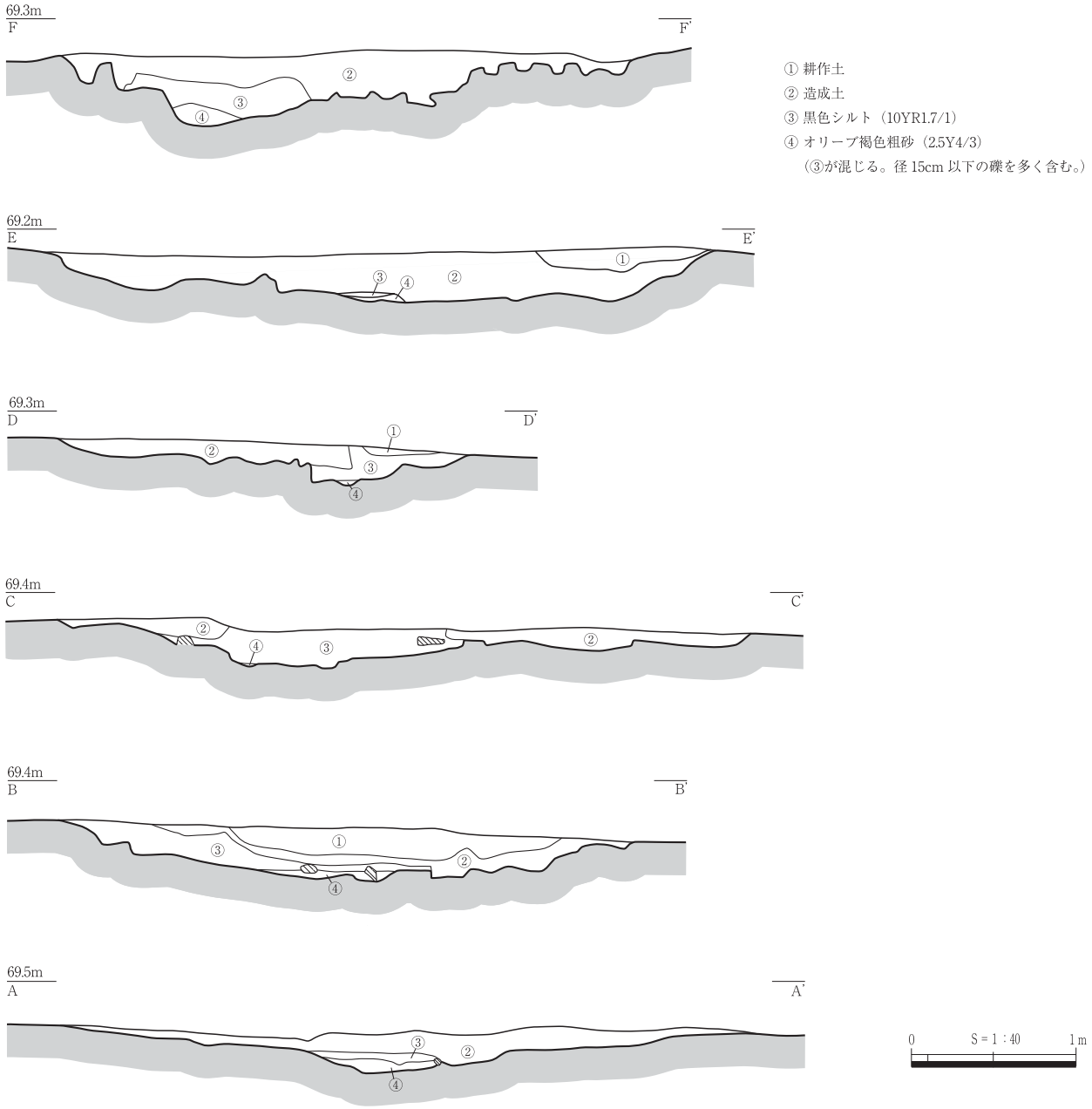
溝の中はシルトの層を挟在する粗砂（４層）で埋まり、３～20cm大の円礫や亜角礫を包含する。４層の上部はD層に由来する黒色シルト（３層）で埋積される。埋土中には土器片が多く含まれ、特に４層中から多量に出土した。

埋土中から出土した土器を第28・29図に掲載した。29・30は縄文土器鉢である。29は造成土（２層）から、30は４層から出土した。31～35は土師器甕である。いずれも頸部の屈曲が緩く、端部は厚みを持つ。31・32が４層、33～35が３層から出土した。36～57は土師器坏である。40を除き、内外面が赤色塗彩されている。40は内面に漆が付着する。48は油煙が付着しており、灯明皿に使用されたものである。36～38、40～45は伯耆国庁第２段階に比定される。38は口径が小さく、体部が内湾ぎみに広がり、口縁端部はわずかに外反する。底部は小さくヘラ切り後に板目痕をつける。58～63は土師器高台付坏であり、いずれも内外面とも赤色塗彩されている。高台の高さは58・59が1.5cm前後、60～63が1cm前後である。64～67は墨書土器で、内外面とも赤色塗彩された土師器坏または高台付坏である。64・65は外面側に、66・67は内面側に漢字のようなものの一部が認められるが、判読できない。68は



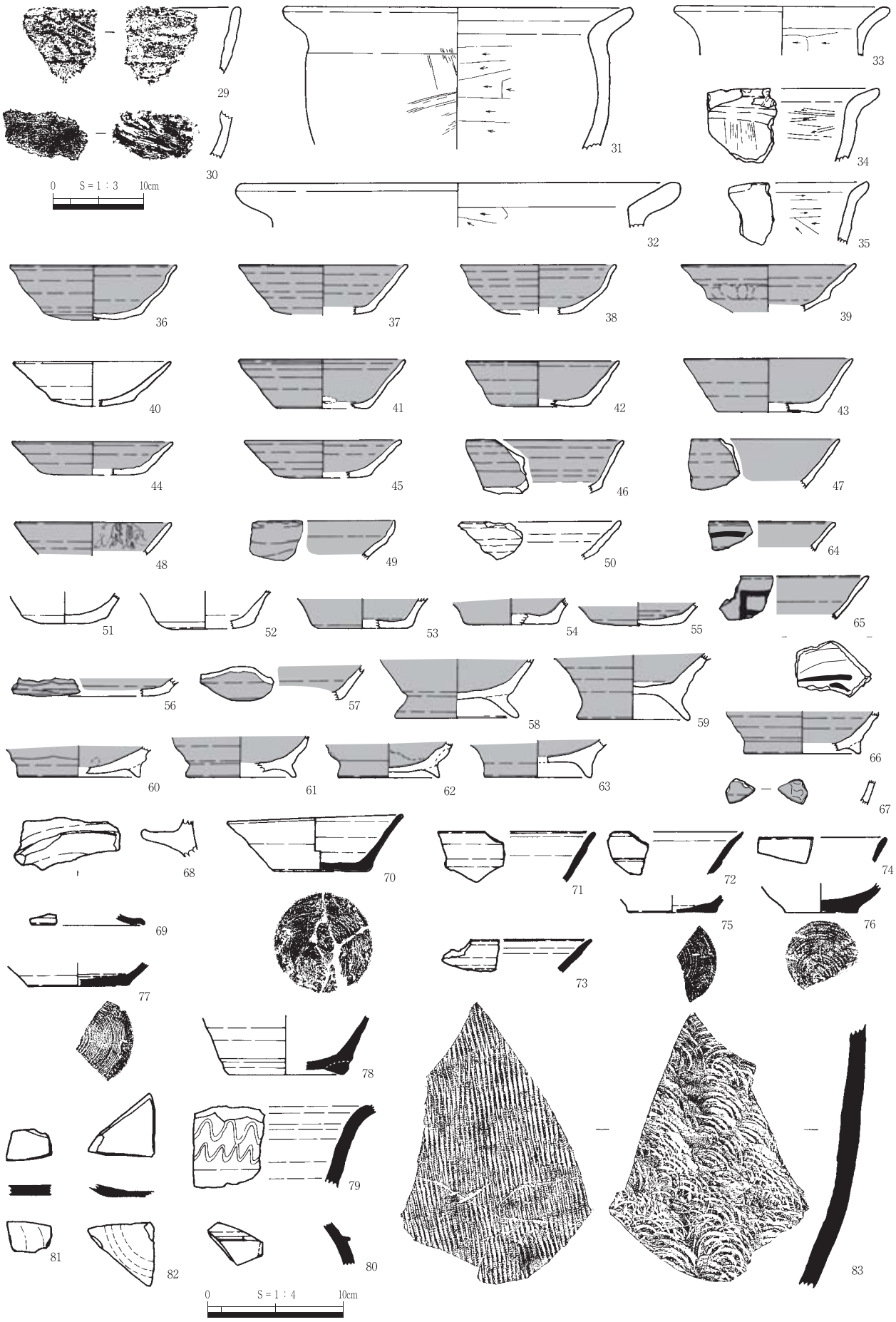
SD1 全体図

第26図　SD1（１）



第27図　SD1（２）

土師器竈の庇部分である。69は須恵器坏蓋である。端部を屈曲させる。70～77は須恵器坏である。70は体部が直線的に外傾し、底部は回転糸切痕を残す。71～73は須恵器坏の口縁部であり、71、74の端部は丸く、72、73の端部は薄くなる。75～77は須恵器坏の底部であり、いずれも回転糸切痕を残す。76は底部が高台状にわずかに高く、体部が内湾する。78は５mm程度の低い高台が付く高台付坏である。70、72、75、76～78の色調は、黄色あるいは橙色を帯び、一見土師器のようであるが、胎土は緻密で須恵器に近く、赤色塗彩も施されないこと、底面に回転糸切痕を持つなどの特徴から、焼成不良の須恵器と判断した。79は須恵器甕の頸部である。二段にわたって粗い波状沈線文が施される。80は須恵器壺の体部と見られ、貼り付け突帯が廻る。81、82は須恵器転用硯である。いずれも須恵器坏の底部を利用したものであり、使用面はよく研磨されている。墨痕はない。83～85は須恵器甕の胴部である。いずれも外面平行叩き、内面同心円文当具が施される。85は外面カキ目が施される。



第28図　SD１出土遺物（１）

第29図　SD１出土遺物（２）

SD１は小規模ながらも恒常的に流れのある河川であったことが推測される。粗砂出土の土器は、表面が摩滅したものが少ないことから、近辺から流入したことを窺わせる。SD１の時期は、４層から出土した土器から、伯耆国庁第２様式から第３様式、９世紀後半から10世紀初頭ごろと判断され、建物と同時期かやや新しい段階で埋没したものと考えられる。

SD５（第30・31図、PL.９・10）

調査区やや東側のＢ７・Ｃ７・Ｄ７・Ｅ７グリッドにあり、標高69.1～69.4mのほぼ平坦面に立地する。造成土を除去した後のＤ層上面で検出した。北側ではSD５の埋土上面からSB３・４の柱穴が掘り込まれていることが確認され、これらの建物より古いことが判明した。東側約２mにSD８がある。

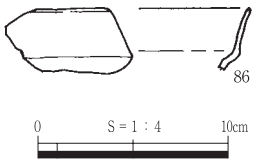
調査区を南北に横断しており、さらに調査区外へ延びている。南側はＮ－５°－Ｅとやや北東方向へ延びるが、Ｃ７グリッド南側でＮ－２°－Ｗとやや西側へ屈曲する。検出した範囲では、全長25.89m以上、幅0.94～1.19mを測る。断面は概ね逆台形状を呈すが、一部底面付近がオーバーハングする箇所も見られた。深さは、0.13～0.33m程度を測る。底面の標高は、南側が69.27m付近で、北側が69.10mとなり、緩やかに北側へ傾斜している。

埋土はほとんどがシルト質で、黒褐色から黒色土系の埋土が単層から３層程度に分層できた。一部底面に砂礫層が観察された箇所がある。

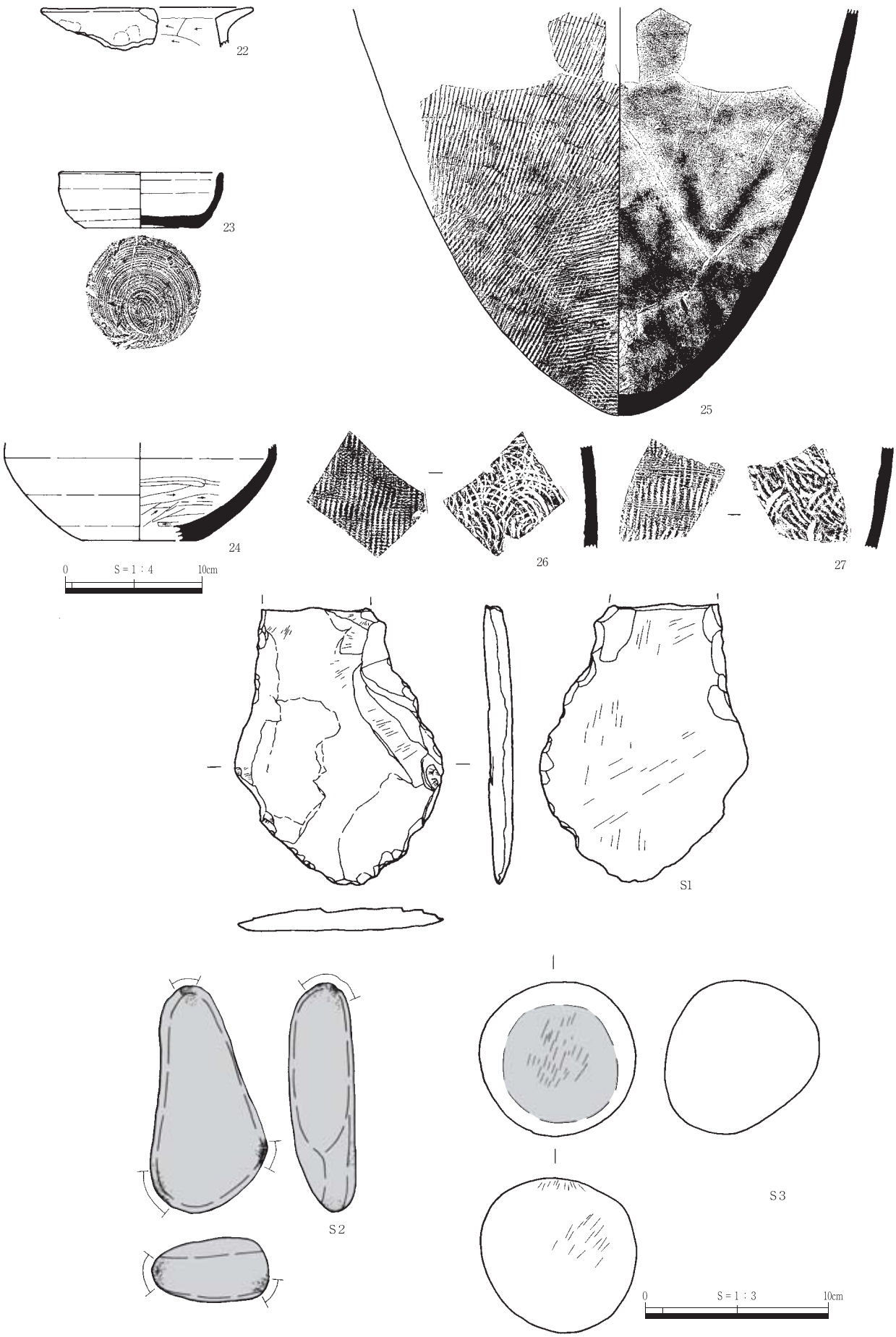
遺物は、埋土中から土器片が出土している。図化したものは、弥生土器甕86で、全面磨耗が著しい。清水編年Ⅵ－２様式、弥生時代終末期ごろのものである。その他小片のため図化できなかったが、平安時代ごろの赤色塗彩された回転台土師器坏片が出土している。86は混入したもので、摩耗が著しいことから、上流から流されたものと思われる。

当遺構に伴う遺物は土師器片と考えられ、出土遺物から、平安時代ごろのものと考えられる。

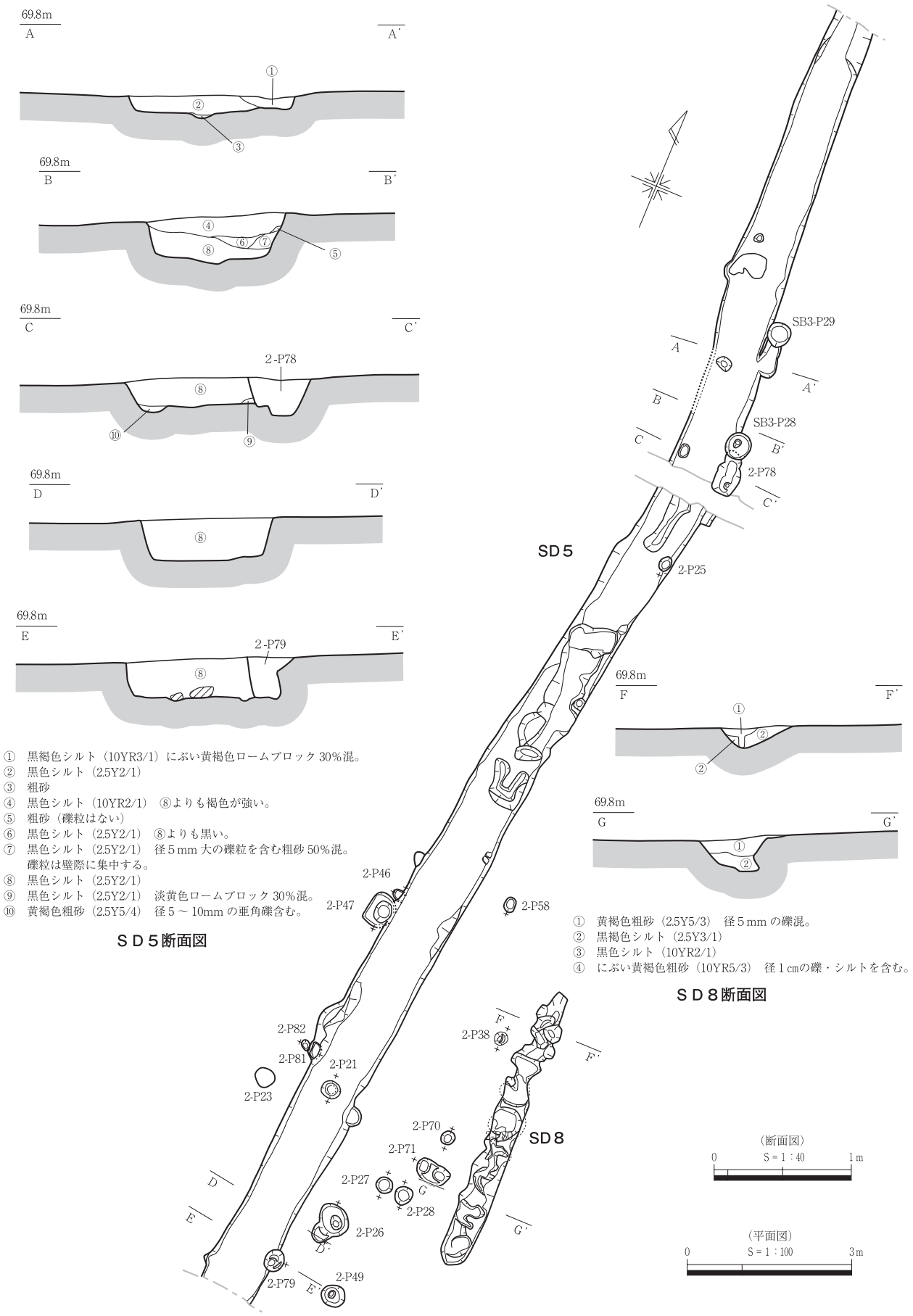
遺構の性格は、人為的に掘り込まれたものであることから、建物を区画する溝であった可能性がある。また、底面で砂礫が堆積することから、ある程度の流水があったものと思われる。



第30図　SD５出土遺物



第23図　SK５出土遺物


69.8m
A
A'
①
②
③
69.8m
B
B'
④
⑥
⑦
⑧
⑤
69.8m
C
C'
2-P78
⑧
⑩
⑨
69.8m
D
D'
⑧
69.8m
E
E'
2-P79
⑧
① 黒褐色シルト（10YR3/1）にぶい黄褐色ロームブロック 30%混。
② 黒色シルト（2.5Y2/1）
③ 粗砂
④ 黒色シルト（10YR2/1） ⑧よりも褐色が強い。
⑤ 粗砂（礫粒はない）
⑥ 黒色シルト（2.5Y2/1） ⑧よりも黒い。
⑦ 黒色シルト（2.5Y2/1） 径５mm 大の礫粒を含む粗砂 50%混。
礫粒は壁際に集中する。
⑧ 黒色シルト（2.5Y2/1）
⑨ 黒色シルト（2.5Y2/1） 淡黄色ロームブロック 30%混。
⑩ 黄褐色粗砂（2.5Y5/4） 径５～10mm の亜角礫含む。
ＳＤ５断面図
SB3-P29
A
A'
B
SB3-P28
B'
C
2-P78
C'
SD５
2-P25
69.8m
F
F'
①
②
②
69.8m
G
G'
①
②
2-P46
2-P47
2-P58
① 黄褐色粗砂（2.5Y5/3） 径５mm の礫混。
② 黒褐色シルト（2.5Y3/1）
③ 黒色シルト（10YR2/1）
④ にぶい黄褐色粗砂（10YR5/3） 径１cmの礫・シルトを含む。
ＳＤ８断面図
2-P82
2-P81
2-P21
2-P23
F
2-P38
F'
2-P70
2-P71
SD８
2-P27
G
2-P28
D
E
2-P26
D'
G'
2-P79
E'
2-P49
（断面図）
0
S＝1：40
1 m
（平面図）
0
S＝1：100
3 m

第31図　SD５・８

SD６（第32図、PL.14）

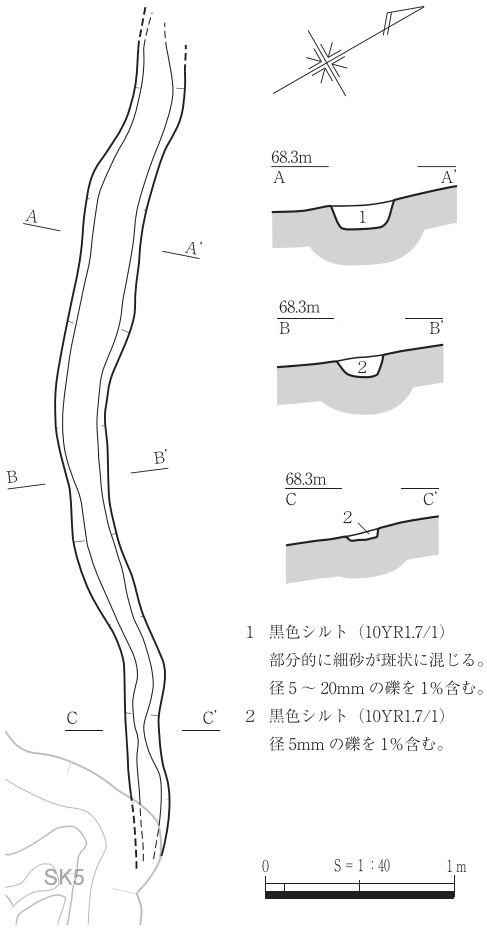
調査区西側の谷地形、D12グリッドの南側にあり、SK５と同時に検出した溝である。検出面は、D層である。

溝の底面は南東から北西の方向（N－60°－W）に傾斜し、谷地形の等高線に沿って蛇行している。検出した溝の長さは4.2m、幅は18～33cm、深さは最大で0.15mである。断面の形状は逆台形である。

埋土は黒色シルトで、混入する礫は地山に由来する。斑状に細砂が混じり、流水ないしは滞水の環境が推定される。

遺物は出土しなかった。南東側でSK５と切り合うが、前後関係は不明である。掘り込まれた層位からすると、SK５と同時期、奈良時代ごろのものと考えられる。

人為的な掘削によるものと考えられ、圃場整備以前の水田の用水路の方向と一致することから、水路としての用途が考えられる。



第32図　SD6

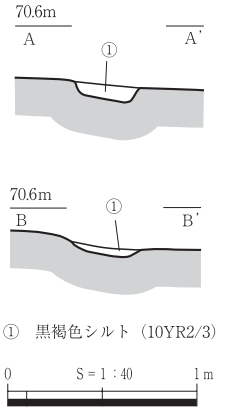
SD７（第33図、PL.14）

調査区東端の農道下、E4グリッドで検出した溝である。検出面はローム混じり礫層（F層）である。

南北方向（N－10°－W）に伸び、南側は調査区外へ続く。検出した長さは6.3m、幅0.4m、深さは最大で0.1mである。底面は南から北へ向かって傾斜し、高低差は約40cmである。断面は逆台形を呈す。

埋土はクロボク系の黒褐色シルト単層であり、流水の痕跡は認められない。

埋土中から土師器竈と推定される板状の土器片が出土したが、部位が特定できず図化し得なかった。詳細な時期は不明であるが、出土遺物から奈良時代から平安時代ごろのものと考えられる。西側で検出したSD4の方向と平行関係にあることから、区画の溝と推定される。



第33図　SD７

Y=-66920.0
Y=-66910.0
Y=-66900.0
Y=-66890.0
X=-54180.0
X=-54190.0
X=-54200.0
C9
C8
C7
C6
D9
D8
D7
D6
E9
E8
E7
E6
SD 1
SD 5
SD 4
SD 8
SA 1
SB4
SB3
SB5
SB6
0
S = 1 : 150
5m

第34図　ピット群２

SD８（第31図、PL.９）

調査区やや東側のＤ７・Ｅ７グリッドにあり、標高69.5～69.6mのほぼ平坦面に立地する。造成土を除去した後のＤ層上面で検出した。西側約２mにSD５がある。

方向はＮ－１°－Ｗとほぼ南北方向に延び、SD５とはやや方向が異なる。検出した範囲では、全長5.35m、幅0.27～0.56mを測る。断面は、深い椀状又は不整な逆台形状を呈すが、一部底面付近がオーバーハングする箇所も見られた。深さは、0.13～0.33m程度を測る。底面は平坦ではなく、凹凸が認められる。

埋土は、黒褐色シルトから黒色土シルトと黄褐色細砂または黄褐色粗砂の２層程度に分層できた。底面にラミナ状に砂層が入る部分と、底面に黒褐色シルト層が入りその上に砂層が堆積する部分が認められた。SD５の堆積と類似する。

遺物は、埋土中から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかったが、平安時代ごろの赤色塗彩された回転台土師器坏片が出土している。

出土遺物から、平安時代ごろのものと考えられ、SD５と同時期のものの可能性がある。

遺構の性格は不明であるが、底面で砂層が堆積することから、ある程度の流水があったものと思われ、現状では部分的な検出に留まったが、本来はさらに南北に延び、SD５に接続する溝であった可能性がある。

６　ピット群

ピット群２（第34図、表７・８、PL.9・10）

調査区中央からやや東側のＢ６～８、Ｃ６～８、Ｄ６～８、Ｅ６～８グリッドにあり、標高68.9～70.0m付近の平坦面に位置する。表土除去後のＤ層からＥ層で検出した。群内にSB３～５、SA１・３がある。

計102基のピットからなり、径９～81cm、深さ３～37cmを測る。散在した状況であり、配列に規則性は見られない。

埋土は、黒褐色土が主体となる。Ｐ17・23・25・29・39・79・89～92では柱痕跡が認められ、復元される柱径は９～19cmである。

Ｐ12・15・16・17・18・20・21・24・42・43・47・58・78・82の埋土中で遺物が出土している。小片のため図化できなかったが、中には平安時代ごろの回転台土師器片がある。

これらの詳細な時期は不明であるが、出土遺物や周辺の遺構の状況から平安時代ごろのものと考えられる。

性格は不明であるが、建物の周辺で柱痕跡が認められるものがあることから、建物建築の際の足場穴として使用されたものが含まれているものと思われる。

７　焼土

焼土１～３（第35・36図、PL.14・22）

調査区西側の谷地形に堆積する包含層を掘り下げる過程で、隣接する３つの焼土面を検出した。東側から順に焼土１、２、３と呼称する。

焼土１の平面形は不整形であり、その範囲は長径1.4m、短径1.1m、深さ0.1m、色調は灰白色を帯び、

表７　ピット群２ピット一覧表（１）

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	25×23－５		Ｐ46	20×17△－７	
Ｐ２	25×22－７		Ｐ47	64×44－21	
Ｐ３	28×24－３		Ｐ48	39×28△－17	
Ｐ４	27×25－10		Ｐ49	49×40－37	
Ｐ５	24×20－８		Ｐ50	70△×42－21	
Ｐ６	11×９－16		Ｐ51	22×13△－11	
Ｐ７	39×35－17		Ｐ52	22×16－５	
Ｐ８	15×14－５		Ｐ53	25×25－24	
Ｐ９	20×17－４		Ｐ54	20×16－17	
Ｐ10	29×27－９		Ｐ55	21×15－８	
Ｐ11	30×28－17		Ｐ56	23×16－12	
Ｐ12	34×25－14		Ｐ57	16×14－13	
Ｐ13	42×41－10		Ｐ58	28×20－８	
Ｐ14	29×25－25		Ｐ59	22×20－９	
Ｐ15	40×32－17		Ｐ60	30×25－27	
Ｐ16	27×26－15		Ｐ61	27×21－10	
Ｐ17	61×34－20	柱痕跡径13cm	Ｐ62	20×17－10	
Ｐ18	30×27－25		Ｐ63	19×17－８	
Ｐ19	27×27－30		Ｐ64	30×23－16	
Ｐ20	53×49－26		Ｐ65	23×20－15	
Ｐ21	37×31－18		Ｐ66	28×26－16	
Ｐ22	32×28－11		Ｐ67	23×20－17	
Ｐ23	36×34－22	柱痕跡径16cm	Ｐ68	23×20－18	
Ｐ24	73×48－26		Ｐ69	26×19－７	
Ｐ25	28×20－21	柱痕跡径12cm	Ｐ70	26×24－11	
Ｐ26	76×62－10		Ｐ71	63×38－25	
Ｐ27	31×30－11		Ｐ72	23×18－13	
Ｐ28	35×31－21		Ｐ73	30×28－31	
Ｐ29	34×33－24	柱痕跡径19cm	Ｐ74	20×16－15	
Ｐ30	23×21－12		Ｐ75	31×24－11	
Ｐ31	21×17－７		Ｐ76	11×10－16	
Ｐ32	28×25－10		Ｐ77	14×10－４	
Ｐ33	30×27－22		Ｐ78	81×45－30	
Ｐ34	38×35－21		Ｐ79	41×34－33	柱痕跡径10cm
Ｐ35	30×23－17		Ｐ80	34※×　－10	
Ｐ36	55×42－17		Ｐ81	28×14△－16	
Ｐ37	17×15－３		Ｐ82	20×14－11	
Ｐ38	25×24－14		Ｐ83	23×21－13	
Ｐ39	22×20－22	柱痕跡径９cm	Ｐ84	35×27－11	
Ｐ40	20×15－８		Ｐ85	16×15－16	
Ｐ41	35△×36－20		Ｐ86	33×31－11	
Ｐ42	70×50△－28		Ｐ87	20※×　－６	
Ｐ43	55×35－14		Ｐ88	30×28－13	
Ｐ44	31×27－16		Ｐ89	25×22－14	柱痕跡径19cm
Ｐ45	23×21－10		Ｐ90	30×25－14	柱痕跡径10cm

表８　ピット群２ピット一覧表（２）

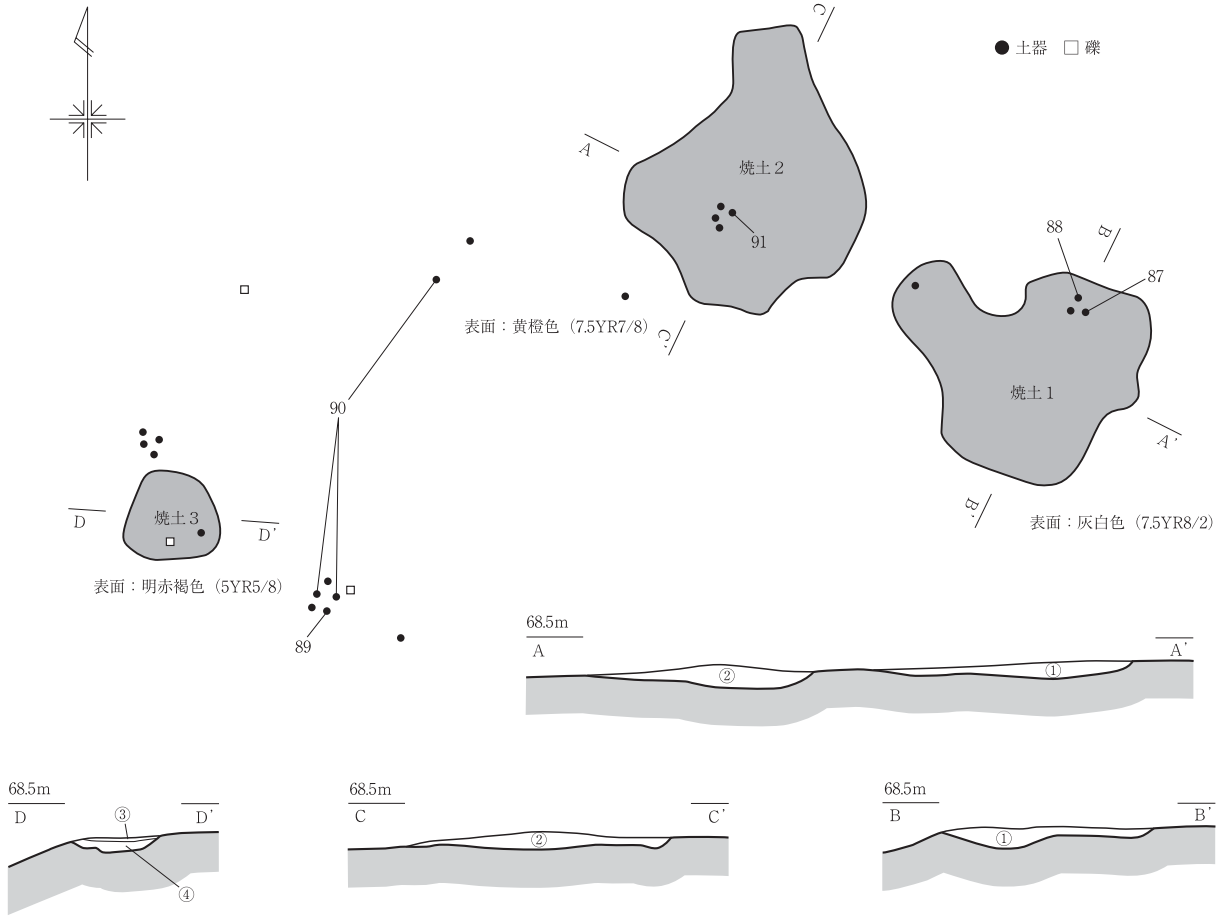
ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
P 91	21×17－12	柱痕跡径11cm	P 97	22×17－３△	
P 92	23×18－13	柱痕跡径15cm	P 98	43×30－16△	
P 93	40×40－17		P 99	30×26－８△	
P 94	27×27－15△		P 100	17×13－７△	
P 95	37×24－４△		P 101	28×27－５△	
P 96	48×30－８△		P 102	25×16－６△	

しまりはない。

焼土２の平面形は不整形であり、その範囲は長径1.5m、短径1.3m、深さ0.1m、色調は黄橙色を帯び、しまりはない。

焼土３の平面形は不整円形であり、その範囲は径50cm、深さ0.1m、色調は明赤褐色を帯び、硬くしまる。

焼土１、２の上面および、焼土２、３の周辺から土器がまとまって出土した。87、88は土師器甕である。頸部が強く屈曲し、端部は薄い。89は須恵器坏である。底部は平底・無高台で、外面に回転糸

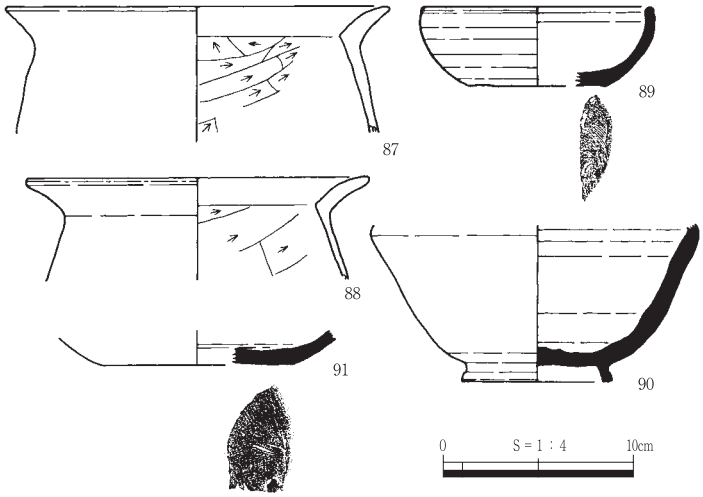


① 黒色シルト（10YR2/1）　灰白色シルト（7.5YR8/2）ブロックが斑状に含まれる。（焼土１）
② 黒色シルト（10YR2/1）　黄橙色シルト（7.5YR7/8）ブロックが斑状に含まれる。（焼土２）
③ 黒色シルト（10YR1.7/）
④ 明赤褐色シルト（5YR5/8）

第35図　焼土１～３

切痕が残り、体部は内湾して立ち上がる。90は須恵器高台付長頸壺である。肩部より上は欠損しているが、割れ口の高さが揃うことから、意図的に打ち欠いた可能性がある。91は須恵器盤である。底部外面は回転糸切後ナデ、口縁部は欠損する。

これらの遺物の時期は８世紀後半ごろと考えられ、焼土面の形成時期を示すものと考えられる。



第36図　焼土１～３出土遺物

文中写真１　重機表土剥ぎ作業

文中写真２　道路下重機表土剥ぎ作業